

咳について考えてみませんか

宮城利府掖済会病院

健診センター部長 角田康典

1.はじめに

咳はきわめて、よく遭遇する症状であり、世界中で、受診理由として、最も頻度が高い症候の1つにあげられています。咳の診療を難しくしている理由の1つに、いわゆる風邪のような原因疾患が予後良好で自然軽快傾向のあるものから、生命に危険のおよぶ肺がんまで、多岐にわたり、しかも呼吸器系以外の疾患も原因となる場合があるなど、広範な病因が含まれていることが挙げられます。そのような背景から呼吸器学会では、咳に対するガイドラインを作成しており、今回は、そのガイドラインにそって、解説を試みたいと思います。

2. 咳発生のメカニズム

咳とは、気道内に貯留した分泌物や異物を気道外に排除するための生態防御反応です。すなわち、気道壁表層にある咳受容体への刺激が、迷走神経（自律神経の一つ）を介して中枢に伝達され、咳が発生します。咳受容体の感受性が正常でも、刺激が過剰となると咳が誘発されます。すなわち、気道内に貯留した過剰な分泌物、気道内に吸い込まれた異物や刺激性ガスなどが原因となり、咳が誘発されます。また、咳中枢は、大脳皮質によってもコントロールされているため、心因性ストレスによっても咳が発生する場合があります。一方、咳受容体の感受性が亢進していると弱い刺激でも咳が発生します。後で述べるアトピー咳嗽や胃食道逆流症による咳などはこれに該当します。

3. 咳の分類

咳は持続期間により、3週間未満の「急性の咳」、3週以上8週間未満の「遷延性の咳」、8週間以上の「慢性の咳」に分類されます。また、痰の有無により、痰を伴わないか、少量のみの「乾性の嗽」と、痰を伴う「湿性の咳」に分類されます。

4. 咳の診断の進め方

急性の咳で、頻度が最も高いのはウイルス性の普通感冒です。その他微生物

による感染の場合もあります。また、急性期においては肺炎、あるいは、肺結核、肺がんなど重篤化する疾患も含まれていることがありますので、高齢者や症状によっては早期に、それ以外の場合でも1～2週以上持続する咳の場合には、胸部 X 線写真の撮影や諸検査を実施することが重要です。遷延性の咳においても感染の持続や感染後の咳の占める比率が高いのですが、慢性の咳となると、非感染性の咳が主体となります。しかし、この場合も、肺結核、肺がんなどの可能性を否定することが重要で、これらが否定された場合、喘息や咳喘息、アトピー咳嗽、胃食道逆流症、ACE 阻害剤（高血圧の薬）による咳などを考える必要があります。また、副鼻腔気管支症候群、慢性気管支炎も原因として考慮する必要があります。

5. 注意すべき咳の原因について

次に注意を要する主な咳についてのべます。まず、感染性の咳で、これは、ウイルスや細菌などの微生物の新たな気道への感染によって気道に炎症が起こり、その部分症状として、咳が見られる状態を言います。感染性の咳は、通常は経過良好ですが、注意すべき点としては、上にのべたように、肺炎をきたしていないか、肺結核ではないかということに常に念頭におくことです。その他の感染として注意すべきものとしては、マイコプラズマ、百日咳、肺炎クラミジアなどがあげられます。感染と関係の深い、副鼻腔気管支症候群とは、慢性で反復性の好中球の気道炎症を副鼻腔など上気道とともに下気道の病変が合併した病態と定義されます。慢性気管支炎はほとんどが喫煙を原因とし、禁煙の有用性が明らかとされています。

非感染性の咳でまず重要なのは、肺がんです。喫煙歴の長い、高齢者には特に注意が必要です。もちろん症状のない肺癌も多数ありますので、疾患を常に念頭におくことが重要です。もうひとつのポイントは、喘息を見逃さないことです。喘鳴症状の有無を、夜間や早朝に重点をおいて丁寧に問診することが重要です。これに関連した疾患として咳喘息があげられます。これは、いわゆる典型的な喘息とは異なり、慢性の咳が唯一の症状である疾患で、気道の過敏性が軽度亢進し、気管支拡張薬が有効とされる喘息の亜型です。治療には吸入ステロイド剤を用います。アトピー咳嗽とは、主に中枢の気道の炎症で、咳受容体の感受性が亢進している好酸球性の気道炎症です。アトピー素因を有する中年の女性に多い咽喉頭の搔痒感を伴う乾性の咳で、診断は、喘息や咳喘息を否

定した上で、この疾患に効果があるとされるヒスタミンH₁受容体拮抗薬（花粉症でよく用いられています）やステロイド薬の有効性を評価して治療的に診断します。胃食道逆流症も慢性の咳と明確な関連があるとされています。この病態は欧米に多いとされていましたが、近年我が国においても食生活や肥満の増加により、増加傾向にあります。この疾患においては、胃酸が食道に逆流し、食道下部の知覚神経が逆流した胃酸によって刺激され、それが迷走神経を介して、咳受容体の感受性をさせ咳を誘発するのではないかと考えられています。そこで、8週間以上持続する慢性の咳で、器質的疾患が除外された後、胸焼けなど胃食道逆流の症状を伴い、咳の原因となる薬剤の服用がなく、気管支拡張薬、吸入ステロイド薬、抗アレルギー薬などの治療が無効あるいは効果不十分な場合、この疾患による咳を疑い、プロトンポンプ阻害薬など胃食道逆流症に対する治療薬を8週間ほど継続して服用し、咳が軽快すれば判断できます。

以上日常よく遭遇する咳について述べてみました。皆さんの参考になれば幸いです。

宮城利府掖済会病院

〒981-0103

宮城県宮城郡利府町森郷字新太子堂5 1 番地

TEL : 022 (767) 2151 (代表)

FAX : 022 (767) 2156

URL : <http://rifuekisaikai.com>